

中国語継続相の意味に関する研究

— 限界的な事象との共起可能性について —

周 振¹

要旨

本研究は事象アспектと視点アспектから構築した2要素の理論枠組みの中で中国語の継続相“着”の意味について再考察し、継続相“着”と限界的な事象との共起可能性を究明しようとするものである。関連の先行研究は完結性と限界性とを混同しており、その考察結果と分析に問題がある。これに対して、本研究は事象のタイプの分類を中国語の実情に合わせて調整した上で、各種類の事象と共起する際の継続相“着”の意味を網羅的に考察した。これにより、継続相“着”の意味がより明確になった。また、これまでの結論と違って、継続相“着”と限界的な事象との共起は基礎レベルと派生レベルの両方において起こり得るということが分かった。関連の用例は、事象の結果段階にフォーカスする従来のものと異なるため、継続相“着”に関するもう一種類の有標の使い方と見なされるべきだと考える。さらに、意味テストを通じて、特定のタイプの事象と共起する場合、継続相“着”は状態の終了の意味を含意するということが明らかになった。

【キーワード】 継続相の意味 限界的な事象 事象のタイプシフト

1. はじめに

テンス・アспектは、言語に関する重要なテーマの1つとして、言語学のみならず自然言語処理や第二言語習得などの関連分野においても盛んに研究が行われている。言語学では、個々の特定の言語を対象とするものはもちろん、言語間の対照研究も多く見られる。中国語はテンスを持たない言語である以上、その時間情報を分析する際にアспектはより重要な役割を果たしていると考えられる。

本研究は、事象アспект (situation aspect) と視点アспект (viewpoint aspect) から構築した2要素の理論枠組みの中で中国語の継続相“着 zhe”について再考察しようとするものである。考察の中心は継続相“着”の意味に置き、主として限界的な (telic) 事象との共起可能性の究明を目指す。関連の先行研究では、このような共起は不可能だと結論付けられているが、考察対象となる言語データは決して十分ではない。また、視点アспектの意味を論じる先行研究の中には、意味 (semantic) レベルのものと語用 (pragmatic) レベルのものとを混同しているものがある。意味レベルのものと違って、語用レベルのものは文脈依存なため、視点アспектの本来の意味の中には含まれない。継続相“着”も視点アспектの1つであるため、その意味に関する議論を行う際には以上の問題に注意を払う必要があると考える。

本論文の構成は以下の通りである。第1節では、研究の背景と目標を明確にする。第2節では、関連の先行研究を取りあげ、問題提起をする。第3節では、事象アспектを紹介し、事象のタイプの分類について本研究で行った必要な調整を提示する。また、事象のタイプシフトをはじめとするいくつかの重要な概念の定義も行う。第4節では、視点アспектを概観した上で、各種類の事象と共起する際の継続相“着”の意味について網羅的に考察する。第5節では、本研究の枠組みの中で関連の用例を分析し、先行研究に見られる課題の解決を目指す。第6節では、意味テストを実施し、特定のタイプの事象と共起する際の継続相“着”の意味について検討する。第7節では、まとめと中国語教育への提言を行う。

¹ 松山大学経営学部講師

Email: z.zhou@g.matsuyama-u.ac.jp

2. 先行研究

限界的事象という概念を実質的に使っていないものも含めて、従来継続相“着”と限界的事象との相性を考察した先行研究は、単一の文を考察対象とするものが多い。例えば、戴耀晶（1997）は、次のような例を提示し、継続相“着”は事象が占める具体的な時間幅を表す語句、回数などの動作量を表す語句、動詞の結果を表す語句と共起できないという事実を観察している。

- (1) *姑娘在钱箱里翻腾着一阵。

「お嬢さんは金箱の中をしばらく混ぜ返していた。」

（戴耀晶 1997）

- (2) *我很得意地又朝空中抡着几拳。

「私は得意げにまた空に向かって何回か拳を振り上げていた。」

（戴耀晶 1997）

- (3) *我在热处理车间找到着王科长。

「*私は熱処理の作業場で王科長を見つけていた。」

（戴耀晶 1997）

その理由について、同氏はこれらの類の語句は事象に完結性を付与するため、継続相“着”で表される非完結性と矛盾するからであると述べている。このように、戴耀晶（1997）は完結性・非完結性を用いて継続相“着”と文脈との関係を説明しようとしているが、問題がある。

まずは、概念的な問題である。Comrie（1976）の指摘の通り、完結性（perfectivity）・非完結性は数多くの研究で使用されている概念だが、その定義は必ずしも適切ではない。第4節で見るように、完結性・非完結性は、事象の全体かまたはその一部にフォーカスするかという話者の捉え方を反映するものである。それは視点アспектに関わる概念であり、事象自体とは無関係である。統語的には、非完結性はアспектマーカ―“着”によって示されるもので、動作の結果を表す語句などで表示できるものではない。これらの関連語句で示せるのは、事象の限界性（telicity）・非限界性である。限界性・非限界性は事象の持つ意味的素性の1つである（3.1節を参照）。限界性・非限界性とは、出来事の結果またはゴールを成す状態の変化を包含する・しないという事象の性質であり、話者の捉え方を反映する完結性・非完結性とは本質的に異なる。

また、経験的な問題も残っている。戴耀晶（1997）の取りあげている例は中国語の全体像を如実に反映しているとは言えない。Vendler（1967）による事象に対する4分類に従って考えると、継続相“着”はAchievement以外の全ての事象と共起可能である。（4）～（7）に示す通りである。

- (4) 妹妹的眼睛红着。（State）

「妹の目が赤いままである。」

- (5) 他嘴里哼着邓丽君的情歌。（Activity）

「彼は口の中でテレサテンのラブソングの鼻歌を歌っている。」

- (6) 太郎走着去学校。（Accomplishment）

「太郎は歩いて学校に行った。」

- (7) *队员们渐渐地到达着山顶。（Achievement）

「隊員たちは徐々に頂上に到着しつつある。」

それぞれの用例に関する詳しい分析は第4節で行うが、今の段階ではとりあえず(6)に注目してほしい。(6)における“去”は移動の方向を示しており、いわゆる方向補語の使い方だと考えられる。“太郎走去学校”は1つの事象であり、しかも歩くという行為は学校に着いた時点で必然的に終了する。つまり、それは固有の終点(natural final endpoint)を持つ限界的な事象である(3.1節を参照)。類似した用例として、(8)や(9)なども挙げられる。(6)、(8)と(9)のような例は継続相“着”と限界的な事象との共起可能性を示している。

(8) 运动员们跑着进场。(Accomplishment)

「アスリートたちは走って入場した。」

(9) 我们趟着过河。(Accomplishment)

「私たちは水の中を歩いて河を渡った。」

なお、Chao (1968) や Li and Thompson (1981) など、方向補語を結果補語 (Chao 1968; V-R Compounds、Li and Thompson 1981; Resultative Verb Compounds) の一種類 (directional RVC) として扱っている研究者もいる。そうすると、(6)、(8) と (9) のような文は結果補語 (方向補語) の入っている例になり、“着”は動詞の結果を表す語句とは共起できないという戴耀晶 (1997) の主張を覆す用例でもあると言える。

(6)、(8) と (9) における継続相“着”の意味は、非完結相(imperfective)に見られる典型的なものであり、即ち終点を除いた事象内部のインターバルにフォーカスする(可視化する)ことである。一方、事象の終点が可視化されていないため、太郎が果たして学校に着いたか否かは(6)の意味の中には含まれていない。実際の状況を考えてみると、太郎はその後歩いて無事学校に着いた可能性もあるし、その途中で交通事故に巻き込まれ遭難した結果、学校に到着することがとうとう実現できなかった可能性もある。更なる議論は4.3節で行うことにする。

さらに、劉綺紋 (2006) では、次のような用例も見られる。

(10) 在这一刹那，她是真心爱着孩子的。

「この瞬間には、彼女は心から子供たちを愛していた。」

(张爱玲《张看》p. 46 皇冠文学出版)

(11) 然而郭凤与米先生在回家的路上还是相爱着。

「それでも家路をたどる郭鳳と米氏は、やっぱり愛し合っていた。」

(张爱玲《留情》《倾城之恋》p. 32 皇冠文学出版)

劉綺紋 (2006) は、“爱「愛する」”や“相爱「愛し合う」”のような状態動詞は通常継続相“着”と共起しにくい、時間副詞句が現れると両者が共起できるようになると述べている。なお、その理由について、同氏は、“着”は状態化操作という役割があり、これによってそもそも時間性のない属性に時間性が与えられるようになり、属性から状態へと変化が生じると説明している。戴耀晶 (1997) と同様に、劉綺紋 (2006) も限界的な事象という概念を使っていない。とはいえ、彼女の言う時間性は、即ち時間的な束縛のことであり、時間性がある・ないことは限界的な事象と非限界的な事象にそれぞれ対応していると言える。従って、(10)、(11) のような用例も継続相“着”と限界的な事象との共起可能性を示している。

しかしながら、劉綺紋 (2006) は、(4) と (10) の違いについて触れていない。“红「赤い」”は形容詞であるが、通常“爱”などの状態動詞と同様に State というタイプの事象を構成する。従って、両者は似たような意味的な振る舞いを見せると考えられる。それにもかかわらず、継続相“着”と共起するためにはなぜ“爱”だけ時間副詞句が求められるのだろうか。また、劉綺紋 (2006) は、時間を示す共起成分さえあれば、継続

相“着”が“爱”のような動詞と共起しやすくなると述べているが、この主張は強過ぎる恐れがある。(12)の示すように、必ずしも全ての時間副詞句が以上のような共起に役立つというわけではない。

- (12) ?从那之后,她是真心爱着孩子的。
「それ以降、彼女は心から子供たちを愛していた。」

(12)にも時間副詞句“从那之后「それ以降」”が付いているが、やや不自然である。(10)と(12)に見られる相違はどのように説明すればよいだろうか。最後に、劉綺紋(2006)では、いわゆる状態化操作の働きをする継続相“着”の意味は明確に定義されていない。

これらの課題を解決し継続相“着”の意味およびそれと限界的な事象との共起可能性を体系的に分析するためには、事象自体の性質と事象に対する話者の捉え方が別々に独立していても両者がお互いに影響し合う言語現象を取り扱うことが可能なシステムが不可欠である。そのためには、事象アスペクトと視点アスペクトから構築した2要素の理論枠組みが必要だと考えられる。

3. 事象アスペクト

本節では、アスペクト研究の重要な一環を担う事象アスペクトについて説明する。事象のタイプの分類とそれを決めるための時間的な素性に関する先行研究を紹介した上で、本研究で行った調整とその必要性について議論する。また、継続相“着”と限界的な事象との共起可能性を論じる際に必要不可欠と思われる事象のタイプシフトについても、具体例を通じて考えていく。

3-1 事象の分類と時間的な素性

事象は遠い昔からその内部に見られる時間的な特徴から分類されてきた。古代ギリシアのアリストテレスは状態(state)と出来事(event)とを区別していた。現代の事象のタイプに関する研究(aktionsart)は、Ryle(1947)やVendler(1967)から始まり、Taylor(1977)、Dowty(1979)、Smith(1997)、Kearns(2000)等によって発展されてきた。その中で最も一般的に知られているのは、Vendler(1967)によるState、Activity、Accomplishment、Achievementの4分類である。

事象のタイプの分類は一連の時間的な素性によって行われる。dynamism、telicityとdurationの3つは最も基礎の時間的な素性である。各素性は自分なりの値を持っており、二元的な表記法を用いると、[static/dynamic]、[telic/atelic]、[durative/instantaneous]のように表記できる。また、ポジティブ・ネガティブを使って、[±static]、[±telic]、[±durative]のような単純表記も一般的に見られる。以下、素性値を用いてSmith(1997)による5分類を提示する。

表1 Smith(1997)による事象タイプの分類

事象タイプ \ 素性値	static	durative	telic
State	[+]	[+]	[-]
Activity	[-]	[+]	[-]
Accomplishment	[-]	[+]	[+]
Semelfactive	[-]	[-]	[-]
Achievement	[-]	[-]	[+]

Semelfactiveは、シングルステージの出来事で状態変化を伴わない。英語の例として、cough、knock at the door、flap a wingなどが挙げられる。当然のことながら、この3つの素性に従う分類は必ずしも唯一の選択肢ではない。例えば、boundedness [±bounded]という素性のみ用いて、単純に事象を状態と出来事に両分す

ることもできる。さらに、中国語については、scalarity [$\pm$ scalar] という素性を付け加え、以上の5つのタイプに Open scale verb という新たなタイプを追加した6分類を主張するものもある (Peck, Lin and Sun 2013)。

要注意なのは、言語学でいう事象のタイプは意味論の範疇に属しており、理想化されたものだという事実である。例えば、通常 cough は Semelfactive で [-durative] という時間的な素性値を持っているとされるが、これは必ずしも世界の真実に一致していない。周知のように、咳を一回行う時間がいくら短かろうが、0秒にはならない。即ち、現実世界では、cough という行為は瞬時的なものではない。また、出来事は状態と異なり持続的なエネルギーの入力が必要だとされる (Comrie 1976)。しかし、これも決して物理の法則に合っていない。慣性の法則によると、外部から力 (エネルギー) が作用しない物体は、静止しているか、または等速直線運動を続ける。要するに、動的な出来事は理論上エネルギーを必要としないことも有り得る。従って、Activity とされる事象は、場合によっては State となる可能性がある。

それにもかかわらず、事象の時間的な素性は確かに言語の統語的・意味的な特徴と密接な関連性を持っており、自然言語を分析するのに不可欠である。例えば、dynamism は agency という意味的な素性に関連していると考えられる。出来事は動的なので、エネルギー源である動作主を持つが、状態は動作主を必要としない。この事実は言語の形式に反映されている。(13) と (14) は英語の例である。State はいかなる場合でも命令文の中に現れないし、代動詞 do を用いる分裂文も作れない。

(13) *Know Japanese!

(14) *What Alastair did was know Japanese.

本研究は基本的には Smith (1997) の分類を踏襲する。ただし、中国語の実情に応じて、duration に対してさらに下位分類を与える必要があると考える。Carlson (1977) によると、状態述語には個体を指すもの (individual-level predicate) と個体の各段階を指すもの (stage-level predicate) がある。前者は “be extinct” や “be a beaver” など永続する属性を、後者は “be available” や “be angry” など一時的な属性を、それぞれ表す。その違いは統語的・意味的な影響をもたらすことがあるとされている (Kratzer 1989)。

アспектについても同じことが言える。Smith (1997) は、中国語の継続相 “着” は stage-level predicate としか共起しないと述べている。Smith (1997) の主張はどこまで中国語の現実をカバーしているのか更なる検証が求められるが、継続相 “着” を考察するものとしては State をより細かく分けておく必要があると考える。本研究は、素性値 durative を transitory と stable に分解した上で、State の代わりに Individual-level State および Stage-level State という2種類の事象のタイプを追加する。その結果は表2の通りである。

表2 本研究における事象タイプの分類

素性値 事象タイプ	static	durative		telic
		transitory	stable	
Individual-level State	[+]	[-]	[+]	[-]
Stage-level State	[+]	[+]	[-]	[+]
Activity	[-]	[+]	[-]	[-]
Accomplishment	[-]	[+]	[-]	[+]
Semelfactive	[-]	[-]	[-]	[-]
Achievement	[-]	[-]	[-]	[+]

Individual-level State と Stage-level State の具体例は以下のように示す。

(4) 妹妹的眼睛红着。(Stage-level State)

「妹の目が赤いままである。」

(15) 我姓田中。(Individual-level State)

「私の苗字は田中である。」

3-2 事象のタイプシフト

文の事象のタイプは基本的には動詞（述語）とその補語によって伝えられる。例えば、(15) では、動詞“姓「姓は～である」”、主語“我「私」”および目的語“田中「田中」”からなるパターンは、「私の苗字は田中である」という State の概念を伝える。これは、例えば、英語の名詞“apple”は、「リンゴ」という可算の概念を伝達することと変わりがない。とはいえ、事象のタイプは統語的には通常無標であり、違うタイプを区別するための明示的な言語形式が存在しない。以下、基礎レベルの事象および基礎レベルの事象タイプを (16) のように定義し用いる。

(16) 基礎レベルの事象（タイプ）(basic-level situation (types)) :

動詞や形容詞などの述語とその補語のみによって構築された事象（のタイプ）

なお、動詞とその補語は必ずしも常に同一の事象タイプに対応しているというわけではない。特定の統語環境の中においては、いわゆる事象のタイプシフトが生じる可能性がある。Smith (1997) を参考に事象のタイプシフトについて次のように定義を行う。

(17) 事象のタイプシフト (situation type shifts) :

基礎レベルの事象が副詞句や前置詞句などの他の要素と共起し、しかも両者の時間的な素性の値が矛盾する場合、事象のタイプが変化し得るという言語現象

例えば、(18a) と (18b) を比べてみると、(18a) は State だが、副詞句“突然间「突如として」”を付けた (18b) は始動相の Achievement に変身する。この場合、完結相 (perfective) “了 le”と共起するのが一般的である。

(18a) 我知道真相。(State)

「私は真相を知っている。」

(18b) 突然间我知道了真相。((inchoative) Achievement)

「突如として私は真相を知った。」

さらに Smith (1997) によると、事象のタイプシフトが起きた場合、次のような規則によってその結果が決まる。

(19) 外部優位の原則 (principle of external override) :

事象のタイプシフトが起きた場合、基礎レベルの事象に比べて、それ以外のいわゆる外部のもの（副詞句や前置詞句など）のほうが常に優位性がある。その結果、外部のものの持つ素性値が文全体の素性値となる。

(18b) の場合、“我知道真相”は基礎レベルの事象で [+durative] の素性値を持つ。一方、“突然间”は外部のもので [-durative] の素性値を有する。両者は矛盾しているが、以上の規則に従うと [-durative] が勝つことになる。その結果、文全体の素性値が [-durative] となり、その事象のタイプは State から Achievement へと変わっ

たわけである。以上を踏まえて、基礎レベルの事象（タイプ）と対照的に、派生レベルの事象（タイプ）を次のように定義する。

(20) 派生レベルの事象（タイプ）(derived-level situation (types)) :

事象のタイプシフトが起きた後の事象（のタイプ）

4. 継続相“着”の意味

視点アスペクトは、事象アスペクトと同様に、アスペクトの研究において重要な役割を果たしている。事象アスペクトは事象自体に注目するのに対して、視点アスペクトは事象に対する話者の捉え方を反映する。むろん、事象に対する可能な捉え方は事象のタイプに左右される。例えば、[-durative]の素性値を持つ Achievement と Semelfactive は内部インターバルを有しないため、その内部にフォーカスすることができず理論上非完結相とは共起できないはずである。それにもかかわらず、両者はそもそも完全に異なるものなので、明確に区別される必要がある。

視点アスペクトは事象の全体またはその一部にフォーカスする。しかも、フォーカスされる部分のみ可視化され、発話・文全体の意味の一部となる。視点アスペクトには主として完結相と非完結相がある。一般的には、完結相は事象の起点と終点を含めて事象の全体にフォーカスする。一方、非完結相のフォーカスは起点と終点を除いた事象内部のインターバルにある。ただし、実際の場合、このような無標の使い方の他にも有標の使い方が存在する。具体的には、例えば、事象自体の範囲を超えた部分にフォーカスするものがある。事象アスペクトと違って、完結相と非完結相は通常特定の言語形式によって明示される。中国語の場合、完結相は“了”や“过 guo”が、非完結相は“着”や“在 zài”を伴う。視点アスペクトは常にこのようなアスペクトマーカーによって明確に区別されている。本節では、中国語の非完結相について考える。

もっとも一般的に見られる非完結相はいわゆる一般非完結相と進行相である。一般非完結相は通常全ての事象タイプと共起できるのに対して、進行相は State には適用されない。また、Dahl (1985) の調査によると、一般非完結相は過去時制に限定される（例えば、フランス語の *Imparfait*; 非完結相付きの過去時制）が、進行相は全てのテンスに対応できる傾向がある。中国語には2種類の非完結相があり、それは継続相“着”と進行相“在”である。

無標の非完結相は終点を除いた事象内部のインターバルにフォーカスする。事象の終点が可視化されていないので、完成や終了はその意味に含まれない。第2節で示した通り、継続相“着”は Achievement 以外のいずれの事象とも共起可能である。以下各共起例を再掲して、より詳しい分析を行っていく。ただし、紙幅の関係で Semelfactive との共起に関する議論は省くことにする。

4-1 継続相“着”と State との共起

3.1 節で示したように、本研究は、State に対してさらに Individual-level State および Stage-level State という2種類の下位分類を与えている。本節では、とりあえず State 全体に関する議論をし、両下位カテゴリーに関するより詳しい分析は第6節で行うことにする。

(4) 妹妹的眼睛红着。(State)

「妹の目が赤いままである。」

State はそもそも起点と終点を持たない非限界的な事象である。そのため、事象内部のインターバルにフォーカスする非完結相と共起しても、可視化される部分（即ち、その意味）があまり変わらないように見える。(21) の意味図示に示す通りである。I と F は事象の起点 (initial endpoint) と終点 (final endpoint) を、/// は可視化される部分をそれぞれ表す。括弧は除外されることを意味する。

- (21) Stateに関する時間的なスキーマ：(I) (F)
 非完結相に関する無標の用法の時間的なスキーマ：I ...///... F
 両スキーマの組み合わせ：(I) (F)
 ///

(22) は継続相“着”を用いない通常の形容詞述語文である。(4) と (22) は、語用のレベルにおいて細かい使い分けがあるものの、意味のレベルではほぼ同じものだと思われるかもしれないが、実はそうではない。

- (22) 妹妹的眼睛很红。
 「妹の目が赤い。」

状態 (statives) と進行形 (progressives) の違いについて、Smith (1997) は (23) のような英語の例をとりあげ、情報伝達の面において状態が進行形よりも柔軟であると述べている。(23a) の主節はコピュラと形容詞からなる状態を示すものであり、その意味が曖昧である。John がガラスを壊す前に、Mary がすでに怒っていた可能性もあるし、John がガラスを壊したとたん、Mary が怒るようになる可能性もある。これに対して、主節が進行形である (23b) については、ガラスを壊すと同時に Mary が歌い始めるという解釈が不可能である。

- (23a) Mary was angry when John broke the glass.
 (Smith 1997)

- (23b) Mary was singing when John broke the glass.
 (Smith 1997)

更なる議論が必要かもしれないが、中国語についても類似したことが言えると本研究は考える。つまり、(4) と (22) の相違は、文の示す事象のタイプの可能性にある。英語と同様に、時間を示す副詞節が現れた場合、その違いがより顕著になる。

- (24) 爸爸进门的时候，妹妹的眼睛红着。(State)
 「お父さんが部屋に入った時、妹の目が赤いままだった。」
- (25) 爸爸进门的时候，妹妹的眼睛很红。(State / (inchoative) Achievement)
 「お父さんが部屋に入った時、妹の目が赤いままだった。」あるいは
 「お父さんが部屋に入った時、妹の目が赤くなった。」

(24) では、妹の目が赤くなった時点は必ずお父さんが部屋に入った時点に先行する。これに対して、(25) の意味は曖昧である。主節の事象が State の場合、その意味が (24) とほぼ変わらないが、始動相の Achievement の場合は、お父さんが部屋に入ると同時に、妹の目が赤くなったという時間的な同時性が含まれる。

“红”などの状態述語は単独でも始動の意味が示せると考えられる理由の1つを、以下のように提示する。(26) の示す通り、中国語の状態述語と完結相“了”とが共起する文は、始動の意味を表すことができる。

- (26) 妹妹的眼睛红了。
 「妹の目が赤くなった。」

このことから、刘月华ほか(2001)を含めた一部の研究は、形容詞などの状態述語と共起する場合、“了”は状態の出現を示すと述べている。しかし、その主張には問題がある。実際のところ、状態を示す述語は必ずしも“了”と共起できるというわけではない。(27)と(28)の示す通りである。

(27) *我弟弟聪明了。

「弟は賢くなった。」

(28) *我朋友热情了。

「私の友人は熱心になった。」

完結相“了”は、“红”や“热「熱い」”などの stage-level predicate とは共起できるが、“聪明「賢い」”や“热情「熱心だ」”などの individual-level predicate とは通常共起しない。この事実は、完結相“了”が始動の意味を表すのではなく、それと共起する stage-level predicate が始動の意味を持つということを示唆している。中国語では、individual-level predicate は状態の意味を表すレキシコンエントリーしか持たないのに対して、stage-level predicate はその他にももう1つのレキシコンエントリーがあり、それは始動の意味を示すものだと考えられる。

この前提の下では、なぜ完結相“了”は通常 stage-level predicate としか共起できないかという言語現象が説明できるようになる。以上述べた通り、一般的には完結相“了”は事象の起点と終点を含めて事象の全体にフォーカスする。そのため、起点と終点を持つ事象 (boundedness という素性で言うと、[+bounded] の素性値を持つ事象) でなければ、通常完結相“了”とは共起しない。individual-level predicate は、状態の意味を表すレキシコンエントリーしか持たず、常に State を構成する。State は [-bounded] の素性値を持つ事象なので、完結相“了”とは共起しにくい。一方、stage-level predicate は始動の意味を表すレキシコンエントリーもあるため、(inchoative) Achievement を構築することが可能である。(inchoative) Achievement は [+bounded] の素性値を持つ事象であり、完結相“了”と共起することができる。

なお、実際の言語データでは、stage-level predicate は2つのレキシコンエントリーのいずれか1つを選ばなければならない場合もあるし、そのうちのどれを選択してもよい場合もある。これは具体的な統語環境によって決められる。継続相“着”や完結相“了”と共起する環境では、必ずどちらかのレキシコンエントリーを決めなければならないが、アスペクトを伴わない通常の形容詞述語文の場合は、両方を選択してもかまわない。そのため、(25)に見られるような曖昧性が生じるのである。

4-2 継続相“着”と Activity との共起

次に、Activity との共起例について考える。

(5) 他嘴里哼着邓丽君的情歌。(Activity)

「彼は口の中でテレサテンのラブソングの鼻歌を歌っている。」

Activity は非限界的な事象であり、固有の終点を有しないが、任意の終点 (arbitrary final endpoint) を持つことができる。無標の非完結相と共起する場合、非完結相はその終点を除いた内部のインターバルをしか可視化しないため、終了 (termination) はその意味の中に含まれない。(29)の示す通りである。 F_{arb} は任意の終点のことを示す。

(29) Activity に関する時間的なスキーマ: $I \dots F_{arb}$

非完結相に関する無標の用法の時間的なスキーマ: $I \dots // \dots F$

両スキーマの組み合わせ： $I \dots F_{arb}$
 $///$

(5) のような継続相“着”と Activity との共起例は非文ではないものの、単独で現れる場合は多少不完全だと感じられる。文脈抜きでは、継続相“着”の代わりに進行相“在”を用いるほうがより一般的だと考えられる。

(30) 他嘴里在哼邓丽君的情歌。

「彼は口の中でテレサテンのラブソングの鼻歌を歌っている。」

これについては、ディスコースのレベルで背景化 (backgrounded) と前景化 (foregrounded) の概念を用いて説明することができる。背景化は、補助的なものとして見なされたり、表されたりする場合について言う。例えば、物語では、ある事象が周囲の環境を提供したり、出場人物の心理や副次的な行為を描写したりして、中心的な話を補助するのであれば、それは背景化されていると考えられる。背景化の類推によって、前景化という概念もある。

数多くの研究者が指摘している通り、継続相“着”は背景化に使われることが多い。直感的には、前景があつての背景なので、単独で使用された場合、伝わる情報が不十分だと感じられてしまう。より一般的に言うと、背景化された事象の発生時は、前景化された事象の発生時を参照時として前方照応的に決定される必要がある (Partee 1973, 1984 などを参照)。つまり、時間的にも、背景化された事象は前景化された事象に依存しているのである。一方、そもそも前景化に用いられる進行相“在”は当然この問題が生じない。

(31) は (5) の前景を補完した一例である。対照のため、完結相“了”が用いられる (32) も提示する。

(31) 有一个男人走进了咖啡厅。他嘴里哼着邓丽君的情歌。

「ある男が歩いて喫茶店に入った。彼は口の中でテレサテンのラブソングの鼻歌を歌っていた。」

(32) 有一个男人走进了咖啡厅。他点了一杯咖啡。

「ある男が歩いて喫茶店に入った。彼はコーヒーを一杯注文した。」

ディスコースのレベルで考えると、継続相“着”の付く文は、通常完結相“了”の付く文のようにディスコースの時間を前進させることはしない。完結相“了”の (32) では、時間的には、コーヒーを注文する出来事は歩いて喫茶店に入る出来事に後続する。ディスコース関係 (rhetorical relations) で言うと、2つの文の間に Narration の関係が成り立つ。これに対して、継続相“着”の (31) では、時間的には、鼻歌を歌う出来事と歩いて喫茶店に入る出来事とが部分的に重複する。

Kamp and Reyle (1993) と Asher and Lascarides (2003) を参考にしながら一部単純化も実施し、このようなディスコースにおける継続相“着”の意味を次のように形式化することができる。

(33) Background:

$$(? (a, \beta, \lambda) \wedge state_{the}(\beta) \wedge \neg state(a)) > Background(a, \beta, \lambda)$$

(34) Temporal Consequence of Background:

$$Background(a, \beta) \Rightarrow e_{\beta} \circ e_a$$

a, β は当該の文・節の意味表示をラベリングするためのラベルである。 λ は、 a と β からなるディスコース (セグメント) をラベリングする。 $?$ は、存在量化子 $\exists$ の作用する変数を解消するためのスコールム定数

(skolem constant) である。 $state$ と $state_{zhe}$ はいずれも状態を示すものであることを意味する述語だが、 $state_{zhe}$ は継続相“着”によって状態が示されているものであることを意味する。「 $>$ 」は論理演算子でモーダル結合記号 (modal connective) である。「 $>$ 」に関する意味論的な (モデル理論的な) 定義は Asher and Lascarides (2003) を参照してほしいが、「 $A > B$ 」は言葉で言うと、「もし A であれば通常 B である」ということを表す。 $Background$ はディスコース関係が $Background$ であることを意味する述語である。

(33) はおおよそ、現在処理している文・節 β がこれまでの文脈の中にある文・節 α に結び付けられ、しかも β は継続相“着”で指定された状態を示すもので α は状態を示すものではないのであれば、 α と β の間のディスコース関係は通常 $Background$ となるということを意味する。さらに、(34) には $Background$ に見られる公理図式 (axiom schema) を示している。 e_β, e_α は α と β における主な事象をそれぞれ指す。「 $\circ$ 」は時間的には部分的に重複することを示すオペレータである。(34) は大まかに言えば、もし α と β の間に $Background$ のディスコース関係が成立するのであれば、時間的には β における事象と α における事象とが部分的に重なり合うことになるということである。

4-3 継続相“着”と Accomplishment との共起

引き続き、Accomplishment との共起例を検討する。

(6) 太郎走着去学校。(Accomplishment)

「太郎は歩いて学校に行った。」

Accomplishment は限界的な事象であり、固有の終点を持つ。無標の非完結相と共起する場合、非完結相はその終点を可視化しておらず、よって完了 (completion) の意味を表示しない。(35) の示す通りである。 F_{nat} は固有の終点のことを示す。

(35) Accomplishment に関する時間的なスキーマ: $I \dots F_{nat}$

非完結相に関する無標の用法の時間的なスキーマ: $I \dots /// \dots F$

両スキーマの組み合わせ: $I \dots F_{nat}$
///

事象のタイプの中に終点に関する情報が含まれているので、(6) を読むと、太郎は学校に着いただろうと思われるかもしれない。しかし、実は必ずしもそうとは限らない。事象の終点はあくまでも推論されたもの (即ち、語用レベルの意味) で、後続の発話などより詳しい言語情報によってキャンセルされることが可能である。太郎が学校に着いたことが (6) の意味の中には含まれていないという事実は、次のような意味テストを実施することによって実証されることができる。(36) と (37) は、(6) に完成と非完成をそれぞれ含意する連言肢を追加したものである。

(36) 太郎走着去学校。他今天也没有迟到。

「太郎は歩いて学校に行った。彼は今日も遅刻しなかった。」

(37) 太郎走着去学校，但是他在路上被车撞死了。

「太郎は歩いて学校に行ったが、途中で車にひかれて死んでしまった。」

その結果、(36) と (37) はいずれも自然である。このように、事象が完成・終了したか否かを知るためにはさらなる情報が求められる。

この点は完結相“了”とは対照的である。(38)は完結相“了”が使われた Accomplishment の文である。

- (38) 玛丽昨天写了一封信。(Accomplishment)

「メアリーは昨日手紙を一通書いた。」

- (39) ?玛丽昨天写了一封信，但是没写完。

「?メアリーは昨日手紙を一通書いたが、まだ書き終わっていない。」

(38) に未完成を明言する連言肢を付け加えた (39) は不自然に感じられる。無標の完結相は終点を含めた事象の全体を可視化しているので、完成または終了はその意味（意味レベルの意味）の一部になっている。(39) では、完成の意味が文の前半に含まれているにもかかわらず、文の後半では一転して未完成を述べているので、両者が矛盾している。連言肢を付け加えるような意味テストは、視点アスペクトの本来の意味を見極めるのに役立つと考えられる。

4-4 継続相“着”に関する有標の用法

これまで紹介した無標の用法に加えて、非完結相には有標の使い方もある。非完結相の有標の使い方には、主に事象の準備段階に注目するものと事象の結果段階に注目するものがある。前者は Achievement と共起する用法であり、英語やフランス語などに見られる。(40) は英語の例である。

- (40) The team was reaching the top.

(Smith 1997)

これに対して、(7) の示している通り、中国語の継続相“着”の場合、“渐渐地「徐々に」”のような副詞句の補助がある統語環境においてもこのような使い方が成立しない。

- (7) *队员们渐渐地到达着山顶。(Achievement)

「隊員たちは徐々に頂上に到着しつつある。」

一方、事象の結果段階に注目する用法は中国語では一般的である。その典型的な例は (41) のような存現文である。

- (41) 墙上挂着一幅画。

「壁の上に一枚の絵がかけてある。」

存現文は出来事の過程とその結果（状態の変化）に言及するものである。従って、duration と telicity の素性値が [+durative] と [+telic] であるような出来事（即ち、Accomplishment）でなければ、存現文を構築することができない。関連の意味図示は (42) のように示す。

- (42) Accomplishment に関する時間的なスキーマ：I F_{nat}

非完結相（継続相“着”）に関する有標の用法の時間的なスキーマ：I F //

両スキーマの組み合わせ：I F_{nat} //

(41) の場合、フォーカスされる部分は事象内部のインターバルではない。その代わりに、継続相“着”は事象の終点以降の部分を実質的に可視化している。そのため、(41) は事象の生起による結果、即ち絵が壁に掛かっている状態が継続しているという意味を表す。むしろ誰かが一枚の絵を壁にかけたという意味、即ち事象の内部インターバルとその終点も (41) から読み取れる。しかし、これは (41) 自身の意味ではなく、その前提 (presupposition) となる。なお、文の前提は文の意味が含意するものであり、単調的に推論される。存現文は状態を示すものなので、agency という意味的な素性との相性がよくない (3.1 節を参照)。その結果、中国語の存現文は動作主が明示的に現れないのが一般的である。

5. 継続相“着”と限界的な事象との共起可能性

第 2 節で紹介したように、限界的な事象という概念を実質的に使っていないものの、戴耀晶 (1997) は (1) ~ (3) のような例を取りあげ、継続相“着”は限界的な事象と共起できないことを示唆している。しかしながら、これは必ずしも中国語の実情を反映していない。まず、Accomplishment と継続相“着”との共起可能性は (6)、(8) と (9) のような例によって明らかである。これらの用例では、事象のタイプシフトが起きていないので、本研究の枠組みの中では、これは基礎レベルの事象との共起例となる。また、劉綺紋 (2006) では、(10)、(11) のような State との共起も見られる。

(10) 在这一刹那，她是真心爱着孩子的。

「この瞬間には、彼女は心から子供たちを愛していた。」

(张爱玲《张看》p. 46 皇冠文学出版)

(11) 然而郭凤与米先生在回家的路上还是相爱着。

「それでも家路をたどる郭鳳と米氏は、やっぱり愛し合っていた。」

(张爱玲《留情》《倾城之恋》p. 32 皇冠文学出版)

同じタイプに属する述語“姓”を用いても似たような例を作ることができる。

(43) 那段时间他姓着继父的姓。

「その頃彼は継父の姓を名乗っていた。」

ただし、第 2 節で指摘した通り、これらの用例に対する劉綺紋 (2006) の分析は不十分である。本節では、本研究の枠組みの中で以上の用例を分析し、先行研究に見られる課題の解決を目指す。

(10)、(11) と (43) はいずれも時間副詞句が入っており、事象のタイプシフトが起きていると考えられる。(10) を例にすると、動詞とその補語からなる基礎レベルの事象“她爱孩子”は Individual-level State であり、[+stable] の素性値を持つ。一方、時間副詞句“在这一刹那”の素性値は [-stable] である。両者に矛盾が生じているので、事象のタイプシフトが発生する。その結果、外部優位の原則に従って [-stable] が勝利し、それが文全体の素性値となる。従って、(10) の事象のタイプは Individual-level State から Stage-level State まで変化する。Stage-level State に変化したからこそ、支障なく継続相“着”と共起できるわけである。なお、事象のタイプシフトが起きることによって得られた Stage-level State は派生レベルの事象タイプであり、しかも [+telic] の素性値を持つ限界的な事象である ((20) と表 2 を参照)。よって、派生レベルにおいても継続相“着”は限界的な事象と共起できるということが確認された。

Smith (1997) は、中国語の継続相“着”は stage-level predicate としか共起しないと述べている。しかし、以上の分析から分かるように、実は継続相“着”は stage-level predicate ではなく、Stage-level State としか共起しないと行ったほうがより適切だと考えられる。そうすると、(4) と (10) の違いについては、以下のように

説明することができる。つまり、(10) では、基礎レベルの事象“她爱孩子”は Individual-level State であり、継続相“着”と共起することができない。従って、時間副詞句“在这一刹那”を付け加えることによって事象のタイプシフトを起こし、Stage-level State に変身させる必要がある。一方、(4) では、基礎レベルの事象“妹妹的眼睛红”はそもそも Stage-level State なので、時間副詞句を追加し事象のタイプシフトを引き起こす必要はない。

劉綺紋 (2006) は、時間を示す共起成分さえあれば、継続相“着”が“爱”のような動詞と共起しやすくなると述べているが、実は (12) の示すように、必ずしもそうなるとは限らない。

(12) ?从那之后, 她是真心爱着孩子的。
「それ以降、彼女は心から子供たちを愛していた。」

(44) 从那之后, 她就真心爱上了孩子。
「それ以後、彼女は心から子供たちを愛するようになった。」

(45) 在那之前, 她是真心爱着孩子的。
「それ以前まで、彼女は心から子供たちを愛していた。」

(12) にも時間副詞句“从那之后”が付いているが、やや不自然である。その代わりに、(44) に示すように、動詞“爱”を始動相の“爱上「好きになる」”に直した上で完結相“了”と一緒に用いるのがより自然に感じられる。これに対して、(10) も (45) も自然な文になっている。その相違について、劉綺紋 (2006) では言及されていないが、本研究では次のように説明することができる。つまり、両者の違いは時間副詞句の限界性にあると考えられる。“在这一刹那”と“在那之前”は固有の終点を有しており、時間的な素性 *telicity* の値は [+telic] である。一方、“从那之后”は固有の終点を持っておらず、*telicity* の素性値は [-telic] となる。以上述べた通り、時間副詞句と共起した結果、確かに Individual-level State から Stage-level State までのタイプシフトが起きている。しかし、Stage-level State の *telicity* に関する素性値は [+telic] であるため、“从那之后”の [-telic] と矛盾してしまう。(12) の不自然さの原因はここにある。

6. Stage-level State と共起する際の継続相“着”の意味

(10)、(11) と (43) のような用例には、時間副詞句の示す限界まで当該の事象が続いていくという意味が含まれる。つまり、Stage-level State と共起する継続相“着”のフォーカスのスパンは事象の終点まで到達している。4.3 節で示した通り、Accomplishment と共起する場合、継続相“着”は終点を除いた事象の内部インターバルに焦点を当てる。無標・有標で考えると、Accomplishment との共起は無標であるのに対して、Stage-level State との共起は有標である。よって、継続相“着”に関する有標の使い方については、事象の結果段階に注目する従来のもの (4.4 節を参照) のほか、事象の内部インターバルプラスその終点にフォーカスする用法も今回観察された。このように、劉綺紋 (2006) の提唱する“着”の状態化操作は、継続相“着”に関する有標の用法の1つとして、事象アスペクトと視点アスペクトからなる枠組みの中に編入することができる。

本節では、さらに Stage-level State と共起する際の継続相“着”のフォーカスのスパン (意味) を検討する。問題は、Stage-level State と共起する場合、継続相“着”のフォーカスのスパンは時間副詞句の示す範囲内に限定されそれを超えていない (即ち、継続相“着”は状態の終了の意味を含意する) のかにある。(46) と (47) は、(10) の後ろに当該の状態がさらに続いているか否かを明言するような連言肢を付け加えたものである。

(46) ?在这一刹那, 她是真心爱着孩子的。后来她还真心爱着孩子。
「この瞬間には、彼女は心から子供たちを愛していた。その後も依然として心から子供たちを愛している。」

(47) 在这一刹那, 她是真心爱着孩子的, 但后来就不那么爱了。

「この瞬間には、彼女は心から子供たちを愛していたが、その後はもはやそこまで愛さなくなった。」

その結果、続いていることを言及した(46)は不自然であるのに対して、続いていないことを明言した(47)は不自然に感じられることはない。また、決定的な証拠ではないが、物語の発展を見ていくと、やはりその後子供たちを本気で愛する心が変わってしまったということを察知させるような展開になっている。(48)の通りである。

(48) 在这一刹那, 她是真心爱着孩子的。……霓喜的手臂仍然紧紧箍在儿女身上, 心里却换了一番较合实际的打算了。

「この瞬間には、彼女は心から子供たちを愛していた。……ニシの腕はやはり息子と娘を抱きしめていたが、心の中ではもう現実在即した考えに変わっていた。」

(张爱玲《张看》p. 46 皇冠文学出版)

意味テストを通じて、Stage-level State と共起する場合、継続相“着”は状態の終了の意味を含意するということが分かった。

さらに、(49)のような継続相“着”と時間副詞句付きの基礎レベルのStage-level State との共起例も見られる。

(49) 那时我正热恋着他。

「あの時私は彼に恋焦がれていた。」

(王朔《王朔文集1 纯情卷(第2版)》p. 274 华艺出版社)

“热恋”自身は stage-level predicate なので、時間副詞句“那时”と共起しても事象のタイプシフトが生じない。この場合、時間副詞句は Stage-level State の含意する時間的な限界を明示化する役割を果たすと考えられる。なお、(50) と (51) に示すように、(49) に対して同様の意味テストを行った結果、これまでの結論が再度確認された。

(50) ?那时我正热恋着他。后来我还热恋着他。

「あの時私は彼に恋焦がれていた。その後も依然として彼に恋焦がれている。」

(51) 那时我正热恋着他, 但后来我对他的爱就不那么热烈了。

「あの時は私は彼に恋焦がれていたが、その後は彼に対する恋心がそれほど激しくなくなった。」

以上を踏まえて、(21) で提示した State と共起する際の継続相“着”に関する意味図示を(52)と(53)に分けてより適切に表示することができる。なお、Stage-level State と共起する際の継続相“着”の意味については、言葉で以下のようにまとめる。つまり、話し手にとって特定の終点を含む期間に渡ってしかもその期間に限って当該の状態が持続することを表す。

(52) Individual-level State に関する時間的なスキーマ: (I) (F)

非完結相に関する無標の用法の時間的なスキーマ: I ...///... F

両スキーマの組み合わせ: (I) (F)

///

(53) Stage-level Stateに関する時間的なスキーマ：I F_{nat}

非完結相（継続相“着”）に関する有標の用法の時間的なスキーマ：I////////F

両スキーマの組み合わせ：I F_{nat}
////////

7. 終わりに

事象アスペクトと視点アスペクトから構築した2要素の理論枠組みの中で、各種類の事象と共起する際の継続相“着”の意味を検討してきた。また、継続相“着”と限界的事象との共起可能性について考察した結果、これまでの結論と違って、このような共起は基礎レベルと派生レベルの両方において起こり得るということが明確になった。本研究における事象タイプの分類に従って言えば、基礎レベルでは、[+telic]の素性値を持つ事象の中 Accomplishment および Stage-level State との共起例がそれぞれ確認された。一方、事象のタイプシフトによって出来上がった派生レベルの事象の場合、継続相“着”は Stage-level State と共起することができる。限界性を持つ時間副詞句はこの種のタイプシフトのきっかけになると考えられる。このような用例は、事象の結果段階に注目するものと異なるため、継続相“着”に関するもう一種類の有標の使い方と見なされるべきだと考える。さらに、Stage-level State と共起する場合、継続相“着”は状態の終了の意味を含意するということが分かった。

中国語を含めた外国語教育の現場では、完結相や進行相の形式と意味に重点を置いて教授活動を展開することが多い。しかし、アスペクトの形式と意味は煩雑で多岐に渡るがゆえに、筆者の経験では期待している学習効果がなかなか実現しにくいことがある。もちろん、授業の時間と受講者の学習意欲のことも考慮しなければならないが、いわゆる完成や持続の意味はフォーカスされる部分の相違から由来した二次的なもの、および事象にはタイプがあることを受講者に意識させることが重要だと考える。その上で、学習者の習得レベルに合わせた形で、視点と事象の共起パターンとその意味を順次（無標の使い方から有標の使い方まで）説明し、練習を重ねることによって知識の定着を目指す。今後筆者の担当するクラスでこのような実践を試験的に行い、その結果について報告をしたい。

謝辞

本研究は2024年度松山大学特別研究助成の援助を得て行われました。言語データに対する意味テストを実施した際に、松山大学の孟子敏先生、望月雄介先生、張曉琳先生、および寧波大学の黃利斌先生から多大なご協力をいただきました。初稿の作成において、著者の恩師である東北大学名誉教授の吉本啓先生から有益なご意見を沢山承りました。匿名査読者には、拙稿に関して貴重なご指摘とコメントを数多くいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 劉綺紋 (2006) 『中国語のアスペクトとモダリティ』 吹田：大阪大学出版会。
 戴耀晶 (1997) 《現代漢語時体系統研究》 杭州：浙江教育出版社。
 刘月华・潘文娛・故韓 (2001) 《实用現代漢語語法》 北京：商務印書館。
 Asher, Nicholas and Alex Lascarides (2003) *Logics of Conversation*. New York: Cambridge University Press.
 Carlson, Gregory N. (1977) A Unified Analysis of the English Bare Plural. *Linguistics and Philosophy* 1 (3) : 413-456.
 Chao, Yuen Ren (1968) *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley: The University of California Press.
 Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. New York: Cambridge University Press.
 Dahl, Östen (1985) *Tense and Aspect Systems*. Oxford: Blackwell.
 Dowty, David (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Reidel.

- Kamp, Hans and Uwe Reyle (1993) *From Discourse to Logic: Introduction to Modeltheoretic Semantics of Natural Language, Formal Logic and Discourse Representation Theory*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Kearns, Kate (2000) *Semantics*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Kratzer, Angelika (1989) Stage-Level and Individual-Level Predicates. In E. Bach, A. Kratzer and B. Partee (eds.), *Papers on Quantification*, Department of Linguistics, University of Massachusetts at Amherst.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1981) *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley: The University of California Press.
- Partee, Barbara (1973) Some Structural Analogies between Tenses and Pronouns in English. *The Journal of Philosophy* 70: 601-609.
- Partee, Barbara (1984) Nominal and Temporal Anaphora. *Linguistics and Philosophy* 7: 243-286.
- Peck, Jeeyoung, Jingxia Lin and Chaofen Sun (2013) Aspectual Classification of Mandarin Chinese Verbs: A Perspective of Scale Structure. *Language and Linguistics* 14 (4) : 663-700.
- Ryle, Gilbert (1947) *The Concept of Mind*. London: Barnes and Noble.
- Smith, Carlota S. (1997) *The Parameter of Aspect*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Taylor, Barry (1977) Tense and Continuity. *Linguistics and Philosophy* 1 (2) : 199-220.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.
- Yeh, Meng (1996) An Analysis of the Experiential GUO in Mandarin: A Temporal Quantifier. *Journal of East Asian Linguistics* 5: 151-182.